

化学工学会 第49回秋季大会
シンポジウム<(7)次世代型脱硝触媒技術シンポジウム> 報告書

オーガナイザー

脇原徹（東京大学）

遠藤明（産業技術総合研究所）

佐々木優吉（ファインセラミックスセンター）

網治登（ファインセラミックスセンター）

伊與木 健太（東京大学）

秋季大会1日目の9月20日、13:00-17:20に材料界面部会シンポジウムのひとつとして、「次世代型脱硝触媒技術シンポジウム」と題しシンポジウムを行った。本シンポジウムでは公募は行わず、3件の展望講演と、6件の依頼講演が行われた。NOx規制は急速に厳格化されており、発生源ごとに必要となる要素技術も幅が広い。そのため、産学官が連携して脱硝技術開発を進めていく必要があるとの考えから本シンポジウムを企画するに至っている。実際に講演は産業界から2件、官公庁から2件、国研から2件、大学から3件と産官学のバランスが良く、脱硝というテーマについて様々な視点からの意見を交換する場となっていた。シンポジウムへの来場者は、開始時44名、途中70数名、終了時にも40名以上と、多数の方にご来場頂いた。

展望講演を例として内容を挙げると、中央大学の岩本先生より「外部アンモニアの供給を必要としないアンモニア選択還元法の開拓」として、現存の複数の技術を比較した上で新しい反応システムの可能性と展望を、トヨタ自動車の平田様より「解析知見に基づく新奇触媒材料創製と三元触媒のNOx浄化能向上」として自動車用排ガス触媒の主流である三元触媒に関してNOx浄化能の向上、現状の課題、展望を、名古屋大学の薩摩先生より「In-situ UV-VisおよびXAFSによるNH₃脱硝用Cuゼオライトのダイナミクス測定～動作温度の低温化を目指して」として近年注目を集めているCuゼオライト中におけるCu種の詳細な分析手法開発とそれによる触媒設計の展望をそれぞれご講演頂いた。

本シンポジウムにより明確になった課題について今後各機関の連携が強化され、脱硝技術開発が進展することを期待したい。

以上